和歌山県立医科大学 記者会見
―沖縄戦没者遺骨収集に参加して―

和歌山県立医科大学
松木順平（4年生），小鮒亜裕美（2年生）
近藤稔和（法医学教授）

今回の遺骨収集に参加させていただいた4年の松木順平と申します。

これから沖縄戦没者遺骨収集について、学生の視点からではありますが、ご報告させていただきます。

令和3年度 沖縄戦没者遺骨収集

沖縄戦の実相｜沖縄市役所
https://www.city.okinawa.okinawa.jp/heiwanohi/2524/2526 より（2021年8月19日閲覧）

- 日時：令和3年8月10日
- 場所：糸満市のガマ周辺
  ※ガマ：沖縄の方言で“自然洞窟”

沖縄は第二次大戦の際に多数の民間人を巻き込んだ地上戦の舞台であり、今もそこかしこで戦没者の遺骨が発見されています。
米軍が沖縄本島に上陸したのは1945年4月1日であり、その後南北に分かれて占領していったそうです。
日本軍は沖縄に米軍をとどめるため、朱里での遅滞戦闘を行いましたが、5月中旬には朱里を放棄して南端の摩文仁に逃れました。
このとき沖縄本島南部の民間人はガマ、いわゆる自然洞窟に避難していましたが、そこに敗残兵が加わることになりました。
沖縄本島での組織的な抵抗は6月22日で終了しますが、その後も散発的に戦闘があり、ガマによっては避難生活も長期にわたったようです。

今回の遺骨収集は、そんなガマが多数存在する沖縄南部の糸満市にあるガマとその周辺で行われました。
沖縄遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さんと日本法医病理学会の先生方をはじめとした方が参加され、感染対策も万全にしていました。

対象となるガマは市街地から山林に少し入ったところでした。

私は子どものころ、裏山の一部を秘密基地と呼んで遊んだものでしたが、本当に子どもが遊びに行けるような場所に遺骨が眠っているというのは衝撃的でした。

今回主として作業したガマは，崖の中腹にあり、入り口までの高さは約1.5メートルでした。
前日まで台風9号の影響で沖縄は雨でしたが、ガマ内部にはあまり吹き込んでいませんでした。

　これはガマの入り口から内部を映した写真です。
　ガマは入るとすぐ左に折れて、幅と高さが約1.5メートル、奥行き約5メートルの洞窟になっていました。
　暗いガマ内部には、日本軍の使用していた靴底がありました。当初は革製だったそうですが、物資の不足によりゴム底に変わっていったとの話を、具志堅さんがしてくださいました。

ガマ内部は暗いため、土砂を外の広場に運び出して分類し、遺骨や遺留品を収集しました。

これは昼休憩中の私です。パック寿司と水分が見えますね。

食事のためにマスクを外していますが、作業中はマスクに加え、長袖の空調服を着ていました。

空調服は本当に快適だったのですが、このあと私は熱中症になりかけてダウンしました。

水分も電解質もこまめにとっていたのですが、それでも足りなかったようです。

私は体力こそありませんが、栄養状態は良く、健康で、空調服のような文明の利器を使用していてもダウンしました。

大戦中、米軍が糸満市まで到達したのは6月に入ってからで、蒸し暑い時期だったと思います。

日本軍の組織的抵抗が終わった6月23日以降も、9月7日の沖縄での降伏調印式を超えても避難生活は続いたと聞いています。

今回見つかった戦没者の方々は、多大なストレスのもと、このような環境で最期の時を過ごしたのかもしれないと感じました。

小さな声を、
聴く力。

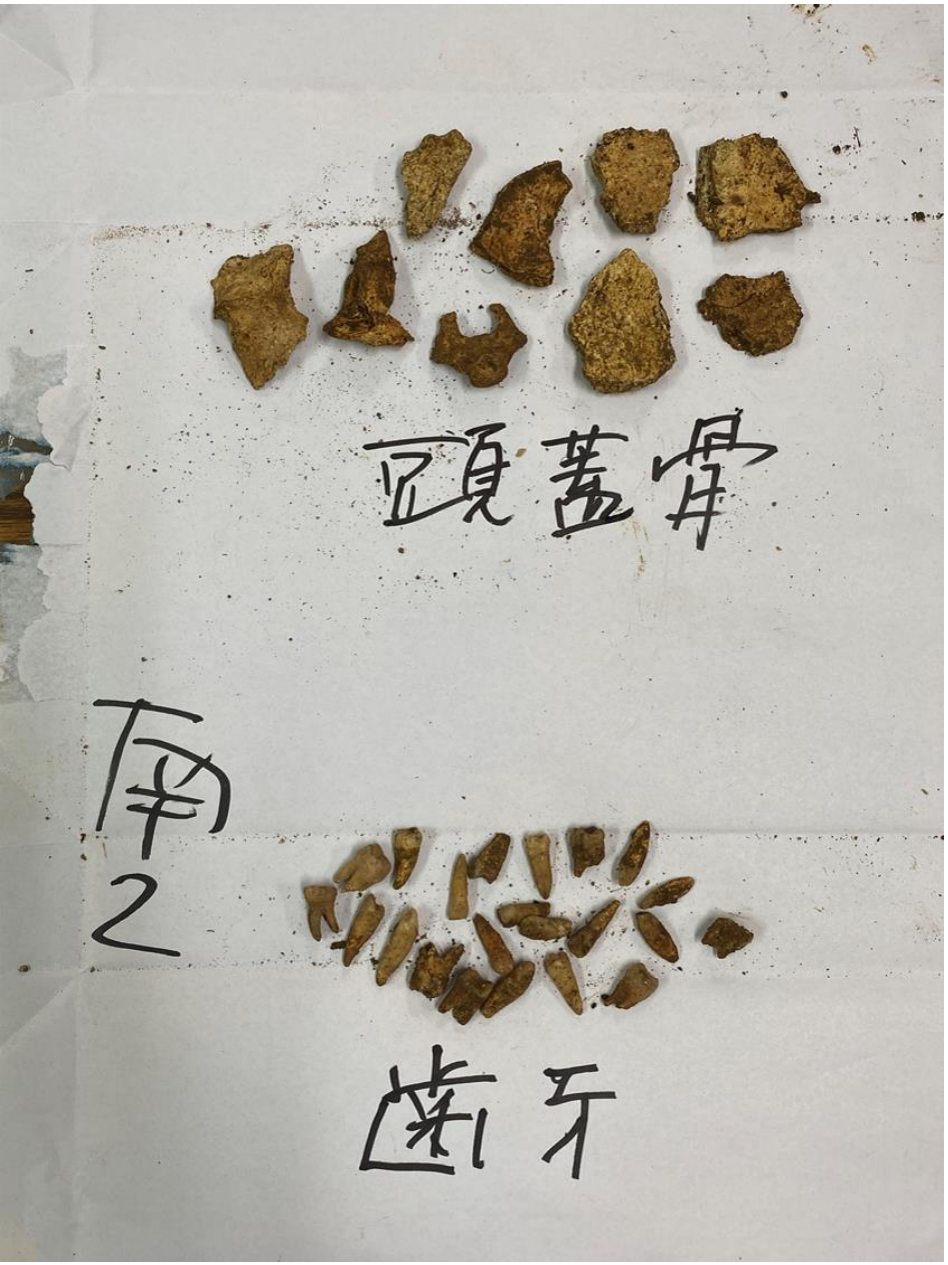
収集したご遺骨と遺留品は、会議室に運ばれました。

ご遺骨は、その特徴から頭蓋骨、歯牙、椎骨、肋骨、長管骨、手足骨、不明骨に分類され、より詳しく検討されました。

法医学では白骨の特徴から死者の性別や年代、およその身長を推定し、また生前の生活を推測し、DNA鑑定と合わせて個人の特定を行っています。

ここにガマフヤーの具志堅さんが持つ大戦当時の物品に関する豊富な知識を合わせ、今回のガマにいらっしゃった方々がどのような方だったか、検討を重ねていらっしゃいました。

ここでは2つのガマから見つかったものを紹介します。


頭蓋骨
南2
歯牙

長幹骨

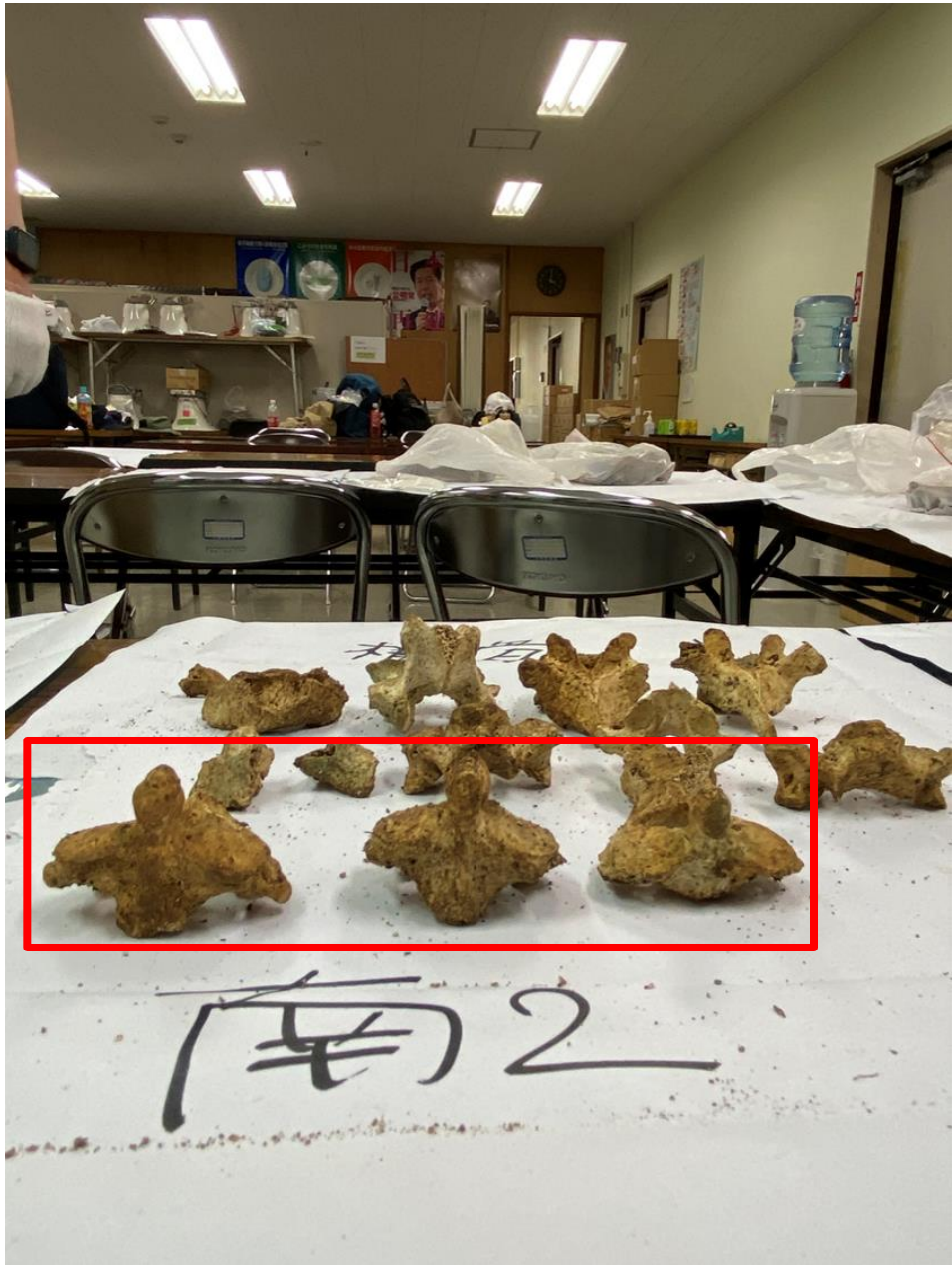
まずひとつ目のガマです。

収集された遺骨は、大部分がばらばらの骨片であり、古いこともあって劣化が進んでいました。

たとえば長管骨の欠片からDNAを採取するのは困難であるそうでした。

しかし歯牙はほぼ完全な形で残っており、DNAが採取できるかもしれないと先生方がおっしゃっていました。

椎骨
南2


南2

今回メインで調査したガマからは、複数の軸椎が見つかりました。軸椎は骨上げの最後に拾い上げられる首の骨で、一人一つです。

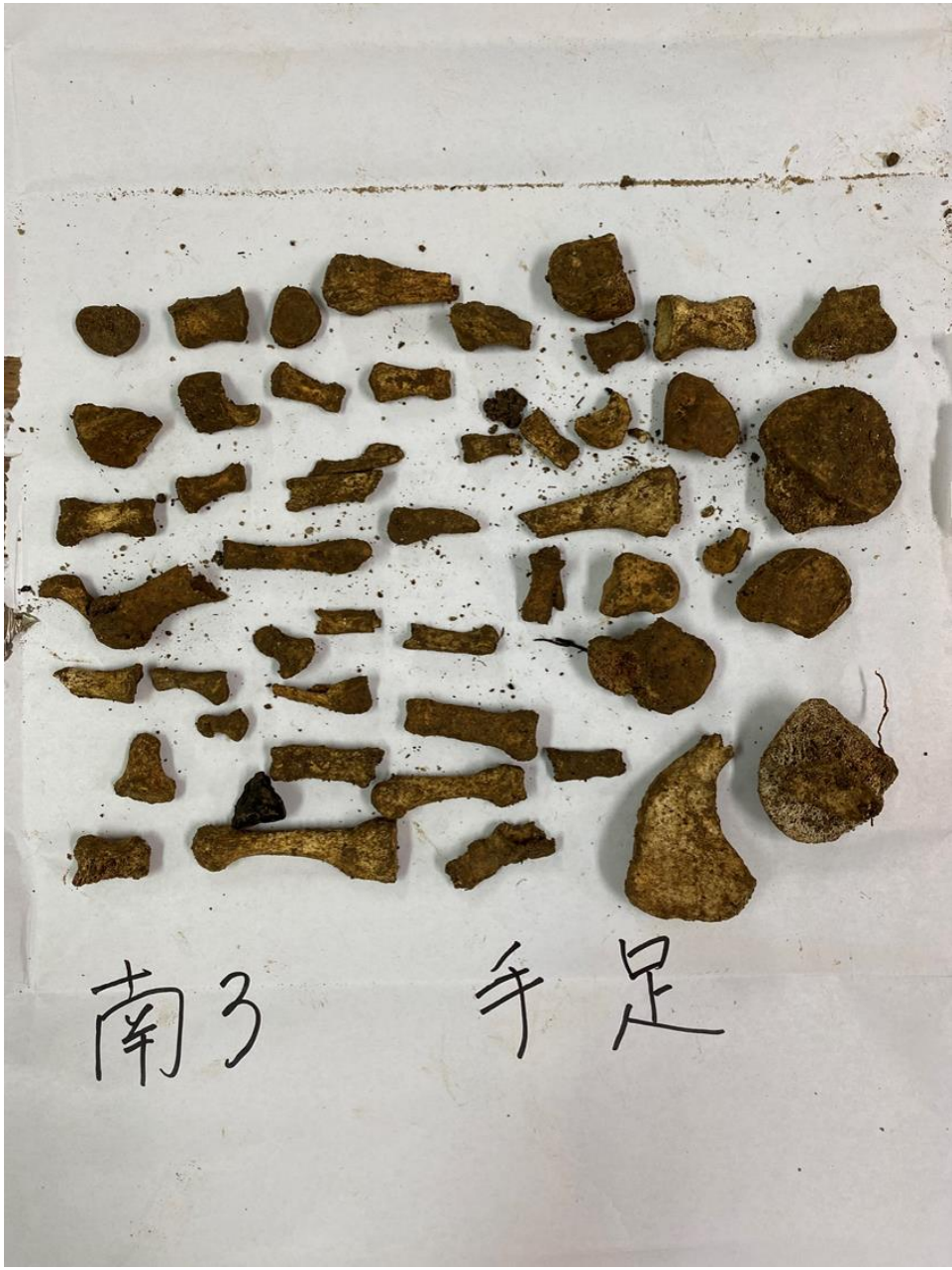
したがってこのガマには少なくとも軸椎の数だけ戦没者がいたことになります。

また写真の腰椎は、椎体に放射状の溝を認めました。

これは10－30代の比較的若年層に認める特徴です。

先ほど示しました歯牙の中には、高度にすり減った臼歯があり、これは逆に高齢者に見られる特徴です。

長幹骨
南3
椎骨


南3
手足

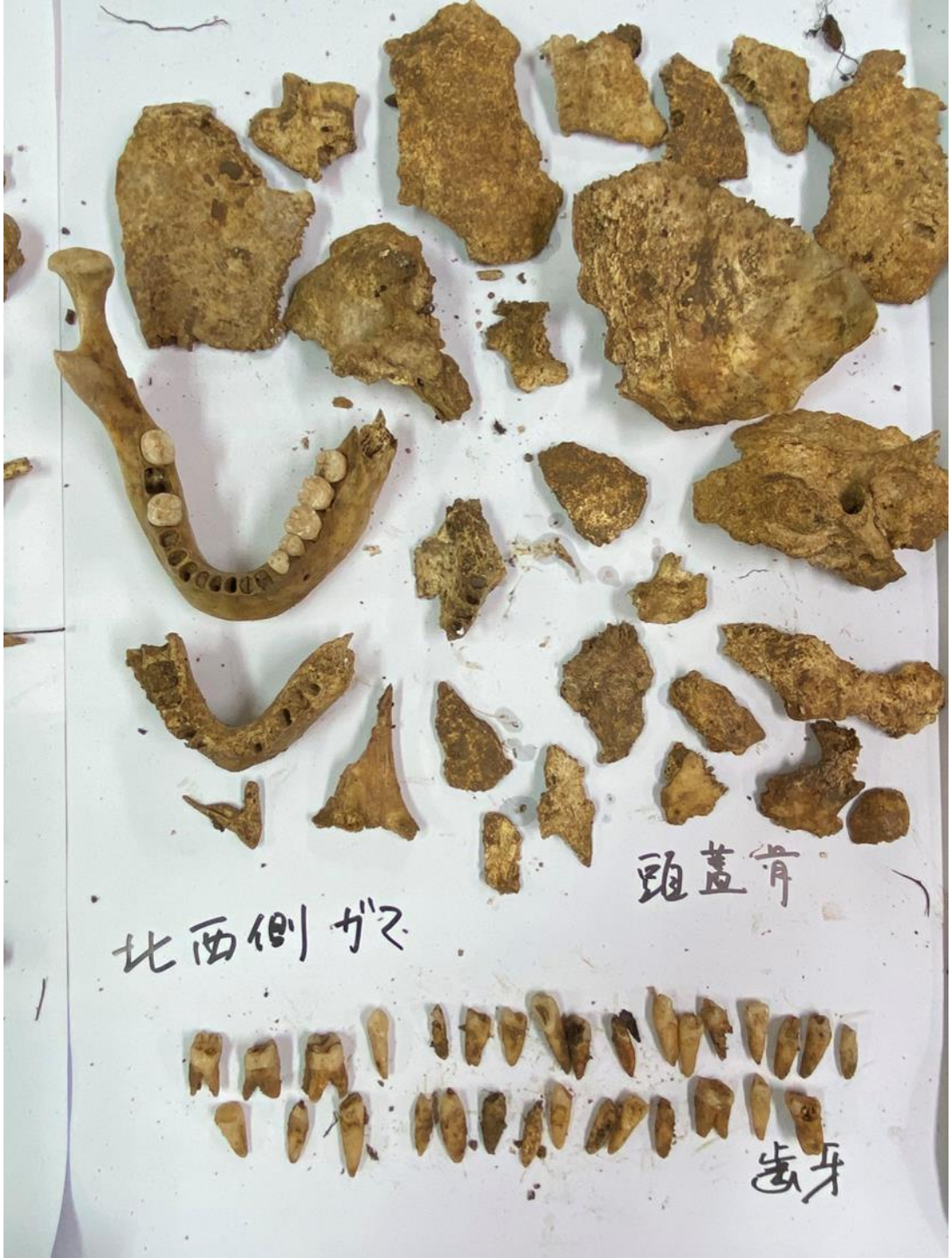
これらは足指の骨ですが、その骨幹は、骨端と分離していました。

これは骨が成長途中であったことを示します。

したがってこのガマには高齢者、青年、小児を含む少なくとも3人以上がいたと考えられ、軍人の靴底があったことから軍人を含んでいたことがわかります。

同じガマからは黒く焼け焦げたような骨片が見つかりました。

出土した遺留品の中には米軍の手榴弾のレバーがあり、具志堅さんの話によると至近距離で炸裂した手榴弾は骨まで焼くそうなので、このガマは米兵に手榴弾を投げ込まれたのかもしれません。


頭蓋骨
北西側ガマ
歯牙

2つ目のガマからは下顎骨が2つ見つかりました。
歯牙のすり減り具合が違うことや、そのうち一方のすり減り具合の歯に虫歯が多く見られたことと合わせても、少なくとも年代の違う成人2柱がいたとわかります。

歯牙
長幹骨
北西側ガマ
推骨
頭蓋骨

特徴がある長管骨はまれでした。
お示ししているのは、前腕の小指側の骨である尺骨の部分です。

　これらの指の先の骨は成人の物より明らかに小さいのですが、先生方の話では子どもの指の骨の間でもサイズが違うそうで、小児が2人いた可能性があるそうです。

　さらにこの2つは背骨のうち骨盤にある仙骨の欠片です。

　ただ、あまりに小さすぎるため、もしかすると胎児のものではないかと議論されていました。

北西側がて
遺留品

遺留品
北西側がて
背盤

2つ目のガマから発見された遺留品の中には当時の日本軍で使われていた装備のほかに、キセルやかんざしが見つかりました。

ただ、このかんざしは大人が使うにしては小さいため、もしかするとここで見つかった2人の小児のどちらかの持ち物だったのかもしれません。

したがって、このガマには高齢者、おなかの大きい成人女性と2人の小児が隠れていた可能性があるそうです。

分類のあと、今回の遺骨収集や、これからのあり方についてディスカッションがありました。

収集された遺骨は沖縄県から厚生労働省にわたって全国の研究室でDNA鑑定にかけられます。

そしてご遺族が科学的に同定されてご遺骨がご遺族のもとへ帰っていきます。

しかしDNA鑑定の科学的な情報だけでなく、死者が最期に誰と、どのような状況で過ごされたかという情報まで届けられたなら、よりよい弔いになる、と具志堅さんは仰っていたことが印象に残っています。

私は今回の遺骨収集に随行させていただき、ガマ周辺の蒸し暑さやガマの狭さを体験するとともに、骨片から先生方が読み取っていく様々な情報や、ずっと遺骨収集に携わってこられた具志堅さんの想いに触れました。

沖縄戦について普通では為しえない学びになりました。

ご清聴ありがとうございました